月刊 名大文学部

第94号
発行：名古屋大学文学部
広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp

教員コラム―No.92

中国多民族集住地域における社会主義的近代の経験とは

坂部 晶子（文化動態学）

中国内蒙古自治区の東北にあるフルンボイル平原と興安嶺の山岳地域は，以前より多様な民族が混住してきた場所です。中国，ロシア，モンゴル国との国境近くにあり，また日本が「満洲国」というかたちで植民地支配を行った場所でもあります。ここにはモンゴル族やエヴェンキ族，オロチョン族，ダウール族やブリヤート人，漢民族などの多様な民族が居住しています。平原では牧畜が主産業であり，山岳地帯では以前は狩猟採集が行われていました。

新中国の成立以降，狩猟民の定住化が進み，近年では草原が分割され，遊牧も制限されています。定住村には政府の支援もあり恒久的な住居が建てられています。医療や教育制度などの普及は，社会主義的近代がもたらした大きな影響です。ここ十年くらいで，道路や飛行場などのインフラ整備も進んでいます。大興安嶺の山中では，現在でもトナカイの遊牧している人びとが若干いますが，狩猟は禁止されているため生活は苦しく，遠くない将来にこうした生業はなくなると考えられています。

中国の改革開放期以降大きく変化したものに，民族文化の復興があります。以前の中国では，民族的活動は最小限に抑えられてきました。経済の市場化が進むにつれ，民族地域の政策的な保護は縮小されると同時に，祭や音楽などのさまざまな民族文化が，手放しではないものの，再現されつつあります。もちろんこうした営みは，現在の制度が許容する範囲内のものにすぎません。ただ一種の商業化がこうした流れを後押ししていると考えられます。さらに，民族文化の復興とはいっても，それは数十年に及ぶ断絶と生業の変化のなかで行われています。ある少数民族の若者は「文化の保護といえばいうほど，失われつつあるという感じがする」といっていましたが，それは消失しつつある言語や文化，生活技術などの危機感のなかで希求されているものです。

開発や発展というマクロな流れのなかで，何を失い何を求めるのかという葛藤は，中国の少数民族地域に限られない普遍的な問題でもあるではないでしょうか。

分野・専門紹介―File28

英米文学を読む（「『フランケンシュタイン』研究」）

分野・専門名：英米文学

英米文学研究室では，イギリス・アメリカの作家による小説や詩，あるいは劇の台本などを対象に研究しています。授業の内容は様々で，作品自体の研究に加え，文学史や文学理論の授業も開講されています。授業の形式は講義と演習の二種類に分かれており，講義では先生方にお話をしていただき，それを学生が聞くという授業が多いです。一方で演習は，学生が毎回テキストの指定された箇所を読み込み，それについて発表・議論するなど，学生が主体となって進める授業となります。

「『フランケンシュタイン』研究」は演習形式の授業で，毎回二名の学生が，その日読む箇所に出てくる難しい単語や表現をレジュメにまとめてきた上で，作品の内容（テーマやモチーフ，登場人物の描かれ方な

ど）について考えてきたこと・調べてきたことを発表します。例えば，『フランケンシュタイン』における美と恐怖の関係について，18-19 世紀における sublime と picturesque の概念の比較を通じて考え，それを発表したりします。他の学生もそれを聞いているだけではなく，分からない箇所について質問したり，自分の意見を述べたりと積極的に議論に参加しなくてはいけません。そのため，授業の予習は重要です。

講義の授業と比べ，演習の授業ではやることが多く大変そうに見えるかもしれませんが，自分で作品についてあれこれと考える分，発見も多いです。慣れてくると，発表が楽しくなったりしてきます。そして何より，演習の授業では一作品を丸々読み進めるので，辞書を引きながら苦労して読み終わった後の達成感はとても大きいです。　（桑山　亮太・学部４年）

分野・専門紹介―File29

「日本語」を学ぶこと（「『万葉集』をよむ」）

分野・専門名：日本語学

私たち日本語学研究室では，いつも当たり前のように使っている「日本語」を，幅広く研究対象にしています。話し言葉や書き言葉，古くから用いられるものから新しく生み出されたものまで，いずれの「日本語」でも「なぜ？」と感じる要素があれば，とことん探求していくことができます。

私たちの授業のなかで，「『万葉集』をよむ」というものがあります。『万葉集』は日本に現存する最古の和歌集です。この授業では，『万葉集』に収録されている和歌に用いられる言葉を深く考察していきます。一人ひとりが関心を抱いた事象について，じっくり調査に取り組みます。またその考察を討論することにより，先生や他の受講生の意見も聞くことができ，新しい視点が生まれる授業です。

例えば，『万葉集』に「我が背子が 見らむ佐保道の 青柳を 手折りてだにも 見むよしもがも」という歌があります。歌中で願望を表している「もがも」という終助詞は，文献資料を調査してみると，和歌にしか用いられないことが分かります。また，それらの用例は９割以上が奈良時代です。一方「もがな」という終助詞も存在し，「もがも」と交替したと辞書に記述されています。調査を進めると，「もがな」は平安時代以降に継続的に使用され，和歌だけでなく地の文にも現れます。そのことから「もがも」と「もがな」は，そっくり交替しただけでなく，機能の差を持つ可能性も考えられます。そこで，両者が接続する言葉の種類の分類や，願望を抱く主体の観察など，様々な方法で分析を進めていきます。

「なぜ？」から立てた仮説を多様な視点を持って検証していき，徐々に「日本語」について理解していく過程はとても面白くやりがいを感じます。　（宮田　莉奈・学部４年）

最近の文学部

暑い夏でした。。

今年の日本の猛暑はヨーロッパでもニュースになったようで，海外からお見舞いのメールが何通も来ました。高温の記録争いで筆頭だったのは，中でも愛知と岐阜です。名大文学部もこの勢いで猛進したいものです（？）。（YK 記）

＊本紙では，名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが，それまで待てない人は…
名大文学部の WEB サイト　https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/　まで（『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります）